

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	アキレウスの死後の物語の変遷における『イリアス』の意義について
氏 名	佐野 馨

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、アキレウスの死後の物語を取り巻く複雑な状況を整理し、その中でも特に『イリアス』が、アキレウスの死を直接描いていないにもかかわらず、アキレウスの死後の物語の形成に小さからぬ役割を果たしているということについて論証することである。

第1章では、アキレウスの死後の物語全体を俯瞰し、問題を整理する。彼の死後の物語は、冥界行きと楽園行きの二つに大きく分けられる。成立時期からすれば、前者の方が先行していたように見える。しかし全体的な数では後者の方が多く、前者の例は『オデュッセイア』だけしか存在しない。一般に、楽園行きの話型が『イリアス』以前に存在したという証左はないため、冥界行きの話型が先行していたと考えられることが多い。しかし、楽園行きの話型が全く存在しなかったとすると、主流の話型が突如として入れ替わったことになり、こちらも不自然である。『イリアス』以前から、楽園行きの話型が存在した、ないしそれが広まる下地ができていた可能性を検討することには十分に意味がある。

第2章では、その検証のために、アキレウス以外のものも含むアフターライフの様々な事例を概観し整理する。アフターライフの話型は大きく三つに分類される。すなわち楽園行き、冥界行きそして神格化である。

楽園行きの話型では、当初楽園は神によって選ばれた特別なものが生きたまま行く場所であり、普通の人間が死後に行く場所ではなかったと見られる。しかし時代が下るにつれて条件が緩和され、普通の人間であっても、倫理的に優れていれば死後に楽園に行けるといいう形に変化していった。

冥界行きの話型は、『オデュッセイア』のネキュイア（11歌・24歌の冥界行）が中心である。精査していくと、冥界の住人にも、犠牲獣の血を飲まなければ意識を得ら

れない通常の霊と、血を飲まずとも意識を持っている特別な霊とがあることがわかる。

また神格化は「英雄霊」になるタイプと、神 (θεός) になるタイプとに分けられる。前者は死後に墓を中心として活動する地下と縁のある存在であり、冥界の特別な霊に近い存在である。それに対して後者は、炎や雷によって神そのものに転じた存在であり、ここまで見てきたアフターライフの在り方とは一線を画す。

第3章では、以上のようなアフターライフ観の間の相違を基に、改めてアキレウスのアフターライフを見直す。二章で見たように、楽園が生きたまま行く場所であったとすると、現存する最古の作品である『イリアス』の時から死の伝承をもっていたアキレウスのアフターライフの物語が、当初から楽園行きを中心としたものであったとは考えにくい。『アイティオピス』成立と同時期に、エレウシスの秘儀にまつわる重要なテキストである『デメテル賛歌』が成立したことを考えると、「死後の幸福」という秘儀宗教の重要な要素がアキレウスの死後の物語と結びつくことで、楽園行きの話型が広まったと考えられる。

『イリアス』とそれ以前については、別途検証が必要となる。『イリアス』ではアキレウスの死後が直接言及されることはないが、彼の死は様々な形で予示される。これはアキレウスの死が『イリアス』にとって重要なテーマであるためである。同時に、『イリアス』においては、アフターライフに言及することが一切避けられており、特別なアフターライフは思い浮かべるべくもないものとなっている。

一方で、叙事詩の環でも『イリアス』以外においては、特別なアフターライフをかいま見ることができる。アキレウスは、霊として地上に現れたことが語られるように、通常の死者とは異なる扱いを受けていたと思われる。そうした描写と二章で見たアフターライフの在り方を比較検討すると、「英雄霊」になったという話型も『イリアス』以前から存在していた可能性が考えられる。

第4章では、『イリアス』における ἥρωος の用法を検証して、アキレウスと英雄信仰との関係を探る。ἥρωος はいわゆる英雄の他、「英雄霊」を表す語でもある。しかしながら、『イリアス』においてはもっぱら、宗教的なニュアンスを伴わない、戦士を表す語として用いられている。ただし、ἥρωος の用法を精査してみると、アキレウスは代表的な英雄であるにもかかわらず、彼が『イリアス』中で ἥρωος と呼ばれる回数はごく僅かである。またそのわずかな箇所についても精査していくと、アキレウスは一度も ἥρωος と呼ばれていなかった可能性が浮かび上がる。

もし仮に、アキレウスを ἥρωος と呼ぶことが避けられていたとすると、それは『イリアス』という作品自体が避けている、アフターライフに触れることと関係があるのではないだろうか。ἥρωος は「英雄霊」や楽園の住人のことをも表しうる語であり、

それらは、『イリアス』が明確に否定していた特別なアフターライフである。

特にアキレウスに対して、ἥρωες を用いられることが避けられているのは、アキレウス自体がそのような意味での ἥρωες と結びつきやすい人物であったからだと考えられる。よって『イリアス』成立時点で、既に彼の英雄信仰や、楽園行きに繋がるような特別視が存在しており、『イリアス』はそれに対抗する形で創り出された、という可能性をこの作品から見出すことができるのである。

第 5 章では、ここまで得られた知見を基に、どのようなことが言えるか整理していく。アキレウスが特別なアフターライフを得るという話は、彼の特別な出自の故に、『イリアス』が成立した頃から既に存在したと推定される。しかし、『イリアス』は彼の特別なアフターライフを明確に否定し、普通の人間として死ぬ姿を描いていた。その後、秘儀宗教の唱える「死後の幸福」の影響を受けて、アキレウスが死後に楽園に行くという話型が生じたと考えられる。その過程において、アキレウスを死すべき人間として描いた『イリアス』が重要な役割を果たしていたということを示して結論とする。